

今年のメンバーが出そろいました。

ルシヤ地区を利用して暮らしている約40頭あまりのヒグマたち。
7月末時点で確認できているメンバー構成をお知らせします。

しばしば出てきていて、この地区を中心に暮らしていると思われる「常連組」と、森の奥やほかの地域を主な生活の場に行っているらしい時々しか出てこない「マイナーメンバー」に分けてご紹介します。



*ここでは、おそらくこれから定住の場を求めて分散して行くであろう若グマたちも、頻繁にみられるものは常連さんと区分けしています。
*8月中旬から、カラフトマスの遡上が本格化すると、もっと多くのクマが確認できると思われます。

区分	常連組			マイナーメンバー		
	名前	性別	その他	名前	性別	その他
メス 0才連れ	ワッキー	♀	子グマ3頭(今は2頭に減少)	ワッキモ	♀	子グマ2頭
	BE	♀	子グマ3頭(今は2頭に減少)	DC	♀	子グマ2頭
	ハッチ	♀	子グマ2頭	クサコ	♀	子グマ1頭
	リッチ	♀	子グマ2頭			
	ドラム	♀	子グマ2頭			
メス1才連れ				名前未定1	♀	子グマ2頭
メス成獣 単独	リンダ	♀		クサビ	♀	
	キリコ	♀		ジュリエット	♀	
	ゴルビー	♀				
若グマ 2~4才	グリ	♀	GPS標識、イヤータグ付き	ビーコ	♀	GPS標識、イヤータグ付き
1才子	ポインタ	♂	キリコの子	名無し1号	?	名前未定1の子
	タンポ	♀	キリコの子、イヤータグ付き	名無し2号	?	名前未定1の子
	リンダリンダ	♂	リンダの子、イヤータグ付き			
	ダーリンダーリン	♀	リンダの子			
オス成獣	イケメン	♂		名前未定2	♂	
	マサミ	♂		名前未定3	♂	



小さな巻き貝ばかり入ったクマの糞。大きな体を養うにはきびしすぎる餌。

一番きびしい季節

7月後半はクマたちにとって、最もきびしい時期です。春から初夏には子ジカや流れついたイルカの死体など、それなりに食べるものがありますが、8月に入ってカラフトマスが川に上がるまでの間は、1年で一番食物が乏しいのです。彼らは小さなアリや、海岸の石に着いた巻き貝、石の下のヨコエビなどを食べてしのぎます。波打ち際でのんきそうに石をめぐっているクマは、実は必死の思いで食物を探しているのです。

金毛輝く美しいクマが・・・

美しい金毛で目のまわりが黒っぽく、パンダを思わせる顔つきのパンコ。彼女は長年ルシャの19号番屋（知床漁業生産組合）近くでくらししてきました。子育て上手で3頭の子グマを育てていた年もありました。網仕事をする漁師さんたちのそばで子供たちと昼寝していることもしばしば。このあたりで一番よく見かけるクマの1頭でした。

2012年の8月、ガリガリにやせた見慣れないクマが、番屋近くの川辺にたたずんでいるのを発見しました。遺伝子

（DNA）からクマたちの血縁関係などを調べていた私たちは、このクマが誰なのか調べようとさっそくサンプルを採取しました。数日後に出た北大獣医学部の分析結果に、私はビックリしました。あのクマはパンコだったのです。変わりとはた姿からはパンコだと判別することはとうていできませんでした。

パンコの死

それから2週間後、パンコは餓死していました。ウトロの漁師さんが撮影した「ガリガリ君」が新聞紙上をにぎわせたその夏、知床半島で極端にやせていたのはパンコや新聞のクマばかりではありません。我々が観察していたクマのほとんどは激ヤセ状態になったのです。餓死したクマやへ口へ口になって町にさまよい出て駆除されたクマも何頭もいました。子グマの多くは親元からいなくなり、おそらくどこかで死んだのでしょう。

シカとクマのせめぎ合い

エゾシカが激増する前の1980年代には、クマたちは5～7月にはフキなどの草本をバリバリと大量に食べていました。8月に入れば、川に遡るカラフトマスが彼らを一気に太らせました。けれど今、7月はとても厳しい時期になったのです。



2009年、パンコは3頭の子グマを産み、育てていた。

かつては全くなかった食事のメニューとしてシカが加わりましたが、子ジカや弱ったシカ以外は、クマはそう簡単に獲ることはできません。逆に、シカが草本を食いつくし、初夏の重要な餌が激減しました。彼らは新しい餌を開拓するしかなく、木の若葉や昔は嫌っていた種類の草、ヨコエビや小さな巻き貝、海鳥のヒナや卵まで食べるようになりましたが足りません。7月末はヒグマが一年で一番やせる時期になりました。でも普通の年であれば、8月に入ると川に上がりはじめカラフトマスをたらふく食って、体重はV字回復できるのです。ところが2012年は、マスの遡上が8月末まで大きくずれ込みました。例年7月の1ヶ月ですむ餌不足が2ヶ月も続いたのです。それが2012年のガリガリグマ続出やウトロ・羅臼の市街地へのクマの大量出没の大きな要因でした。

キムンカムイの寛容さ

この異常事態に私は改めて考えさせられました。一つは、もし地球温暖化が現実になったら、わずかな気温・水温の上昇が魚やクマなどの生物たちに如何に重大な影響を与えるかということ。もう一つは、人前をのんきにうろついて困ることが多い知床のクマだけど、彼らの信じられないほどの寛容さについてです。クマにとって襲おうと思えば、人間ほど簡単なものは他にありません。しかし、飢え死にするほどの極限状態でさえ、へ口へ口になって出てはきても、襲ってくるようなクマは一頭もいなかったのです。

そんな彼らだからこそ、何とか折り合いを付け、被害を防いでいくために、私たちにはまだまだ工夫できることはあるなあと改めて思いました。例えば、クマを誘引して問題を起こしてしまうゴミステーションや魚干し場の改良、加工場の魚の残渣の管理等々。人とヒグマ、世界遺産に共に暮らす住人としてのちょっとした気配りが求められます。

文責：山中正実（知床博物館）



2012年8月、死の2週間前、やせ細ったパンコ。